# ルイス・キャロル と テニスン

笠 井 勝 子

## はじめに

ルイス・キャロルとテニスンが初めて会ったのは1857年9月である。訪ねてきた青年写真家（と詩人は思っていた）をテニスンと夫人は快く迎えた。湖水地方にあるテント・ロッジで，またワイト島のファリングフォードで，キャロルは憧れのテニスンとその子どもたちの写真を撮り親しく詩人の話を聞く機会に恵まれた。ところが1870年に潔癖な青年は完璧を心掛ける詩人に神経を逆撫でする手紙を書いて関係が冷めてしまった。

本稿ではキャロルが最初にテニスンを訪ねた時よりさらに7年前の1850年から関係がすっかり途絶えてしまう1873年にかけて二人の交流を中心にみていく。テニスンについてはノーマン・ペイジの *Tennyson An Illustrated Life* から，ルイス・キャロルについては日記 *Lewis Carroll's Diaries* 1-6巻，モートン・コーエンの *The Letters of Lewis Carroll*，コリングウッドの *The Life and Letters of Lewis Carroll* によった。キャロルの写真「乞食の少女」とテニスンの詩「乞食乙女」の関わりについては，2001年にワイト島のファリングフォードで開かれたルイス・キャロルの研究大会におけるキース・ライトの指摘[1]を参考にした。

## 1．1850年からアグネス・ウェルドの写真まで

テニスンは自分の詩をなかなか出版したがらなかったが，1850年3月には出版社モクソンに頼んで，長い間出版しかねていた詩を6部だけ印

刷し，１部を1833年に婚約していたエミリ・セルウッドに与えた。彼女は繰り返し繰り返し読み，畏敬と賞賛と喜びを覚えたという。その詩に「イン・メモリアム」という題を付けたのはエミリだった。1850年５月にその初版が出るやすぐ増刷になった。同じ年の４月23日には桂冠詩人ワーズワースが世を去り，ポストは空席のままになっていた。『タイムズ紙』は後任がいつまでも決まっていないことを書いた。11月になり，テニスンがその後任に選ばれた。同年６月13日にテニスンは自分の家族の誰にも知らせずに，レディングから４マイルほどのシップレイクの知合いの牧師のところでエミリと結婚式を済ませた。当日はウェディング・ケーキも花嫁のドレスも間に合わず，花婿は白い手袋をどこかに置き忘れていた。テニスンの伝記著者ノーマン・ペイジは，そのようなテニスンを，「自分の決心が変わってしまう前に結婚に飛び込むことにしたかのようだ」と書いている。1809年生まれのテニスンはこの時41才であった。

1851年春から翌年にかけて，テニスンはエミリ夫人とトゥイックナムにあるチャペルハウスに住んだ。息子ハラム・テニスンが生まれたのは1852年８月11日である。後に彼は秘書として父テニスンを助け，またテニスンの死後には伝記を著した。

ハラムの前に生まれたテニスンの最初の子どもは死産[2]で，テニスンにはそのことが忘れられず，トゥイックナムのチャペルハウスを離れることにして田舎に家を探しはじめた。1853年秋になってワイト島へ渡ったテニスン夫妻はファリングフォードというカントリーハウスを見つけて借りた。1855年７月に「モード」を出版すると１年足らず後にはその売り上げでファリングフォードを買い取った。

テニスンには大きなできごとが続いた1850年の翌年，キャロルはクライスト・チャーチに入学した。19才であった。

彼がテニスンに会うための糸口を摑むことになった写真に手を染めたのは，入学して５年後の1856年である。翌年，大学が夏の長い休暇に入

るとキャロルはカメラを持ってクロフトへ帰省した。今ではその扱いも板に付き腕前は上達していた。彼は写真を写すときには，ちょうど画家が絵を描くときのように被写体ばかりでなく全体の構成にも目を配った。キャロルは自分の絵画の腕前について意見を聞いてみた美術評論家のラスキンから，「努力してもみるべき成果は期待できない」と言われたために，彼の絵心は写真にそのはけ口を見い出した。あとはふさわしい被写体を見つけることである。

1857年8月18日，クロフトに帰省していたキャロルは家族の住む牧師館を訪れてくるさまざまな人に出会い，気に入れば写真を撮った。そのような折りに王立協会の事務次長をしていた人の妻でアン・ウェルドという女性に紹介された。アン・ウェルドはテニスンの妻エミリの妹で，一緒に連れてきた娘はアグネス・グレイスといった。テニスンの詩を愛読し，いつかは会ってみたいと願っていたキャロルにとって，これはまたとない機会であった。

アン・ウェルドと娘のアグネス・グレイスがクロフトで滞在していたのは，1839年から5年間をかけてウィリアム・チェイターが家族のために住いとして建てた石造りで立派な外観のクラヴォー城であった。(建物は1950年に取り壊されて現在は残っていない。)チェイターはクロフトにおいて代々続いた土地の勢力者で，教区内をも牛耳っていて教会の建物の改修工事さえ牧師の自由にはさせない人物であった。クロフトの聖ペテロ教会の主任牧師であったキャロルの父もチェイターとそれに組みする人々のなかで苦労した[3]。

ウェルド夫人は詩人のフランシス・ポルグレイヴと親交があり，彼は幼いアグネス・グレイスのためにソネットを作っている。キャロルは手に鳩を乗せたアグネスと，マントを着て箒を持ったアグネスの写真を撮り，マント姿の写真には「赤ずきんちゃん」という題をつけた。その写真をウェルド夫人を通してテニスンに届けたところ，テニスンは「実に

可愛い」と褒めた。キャロルの喜びはひとしおで，写真撮影に自信を深めていく。「赤ずきんちゃん」の写真は自分のアルバムに入れて，ポルグレイヴの作ったソネットを探し出し，その下に書き写している。その一節は，

おお，枝に咲く花のみごとなこと[4]
まこと，周囲を照り輝やかすもの

というのであるが，これだけではもの足りなかったのか，写真の向かいの頁に，自分で次の詩を作って書き入れた。

ふかいふかい森の奥
子どもがひとりにこにこ歩む
しずまりかえった寂しい森
お話しながらほほえみながら
赤いフードを目深に下ろし
ゆたかな巻毛を押さえつつ

とうとう抜けた迷い道
これでやっと，こわくない
まぶしい光は，瞬きさせて
ふりそそいでくる明るい日差
ふるえたりせず，ふりむかず，
立ち止まらないで抜け出した，
近くに狼いたけれど[5]

アグネス・グレイスの「赤ずきんちゃん」は森の中で狼に狙われていた子どもの恐怖をうまく表現している。キャロルが撮った写真としては珍しく，子どもは硬くなってカメラに向かいしかめつらをしているよう

に見える。アグネスにはそのほかに鳩を手元においた写真がある。しかし「赤ずきんちゃん」の写真は，扮装して写真を撮るという趣向がもの珍しかったのか，当時の人々には評判がよく，キャロルはロンドンの写真協会の第5回写真展に出品した。

## 2．テント・ロッジ訪問

1857年9月に，キャロルは二人の弟スケフィントンとウィルフレッドと共にスコットランドと湖水地方を旅行した。三人で湖水地方のアンブルサイドに宿をとると，キャロルはひとりでコニストン・ウォーター湖へ歩いて行った。そこにはテニスンが夏の間だけ借りているテント・ロッジがあった。テント・ロッジは，リーズ選出の国会議員ジェイムズ・マーシャルの持ち家であった。

かなりためらいはしたが，キャロルは勇気を出してテント・ロッジを訪ね，訪問用の名刺の名前の下に「『アグネス・グレイス』と『赤ずきんちゃん』の写真撮影者」と書き入れて玄関で差出した。9月18日のことであった。テニスンは不在だったが，エミリ夫人は気持ちよく応対してくれて，1時間ほど話ができた。息子のハラムとライァネルも出てきて，キャロルの日記のことばで言えば，「今まで見たあの年ごろの少年では，一番きれい」な子どもたちに会えた。エミリ夫人は子どもたちの写真を撮りにくるようにと言い，さらにテニスンも写真を撮らせてくれるのではないかと希望を持たせた。夫人はまた，テニスンのサインをもらってくれることも約束した。

テニスンの二人の息子はすぐにキャロルに対して打ち解けて，「二人とも私が帰る時には，一緒に送っていくと言い出した。行き先が遠いことなどはまったく問題でないようだった。」 キャロルはこの日の日記を「白い石で記念する日」と締めくくっている。

宿泊先のアンブルサイドへ戻ってそこに3日間留まり，その間にキャロ

ルは副牧師イアタン・フェルの子どもやスコットランドの裁判所長だった故デイヴィッド・ボイルの孫娘の写真を撮った。9月22日にアンブルサイドからコニストンへ宿を移してホテルに荷物を置くとエミリ夫人に会うためにさっそくテント・ロッジを訪ねた。応接間に通されてしばらく待つとドアが開き，一風変わった容貌の髭もじゃの男が入ってきた。テニスンだった。

「髪も，口髭も，顎髭も，雑然としていて無精に見えた。髭のせいで顔立ちがほとんど隠れてしまっている……ダブダブの上着を着て，チョッキとズボンは灰色のフランネル，それに黒い絹のネッカーチーフを無造作に巻いていた。黒い髪をしている。目も黒だったと思う。まなざしは鋭く，落ち着かない。鼻はわし鼻，額は高く広い，顔も頭部も立派で男らしい。物腰は親切で，友だちに対するように接してくれた。話し方には辛口のユーモアが潜んでいた。」

これは1857年にキャロルが初めてテニスンに会ったときの印象である。

テント・ロッジにキャロルがテニスンを訪ねた目的は，テニスンに会うこととハラムとライアネルの写真を撮ることであった。しかし一家はちょうど翌日にそこを引き払い，3日後にモンク・コニストン・パークのジェイムズ・マーシャルの家に滞在する予定になっていた。マーシャル家はテント・ロッジから1.6キロ程の所にあるヴィクトリア朝風ゴシック様式の建物だった。テニスンは親切にもキャロルを伴ってマーシャルの家まで行き，屋敷内に写真器材を運び込んで写真を撮らせてもらえるかを聞いてくれることになった。

一緒にでかけた道すがら，キャロルはそれまで疑問に思っていたテニスンの詩について訊ねた。一つは「モード」の中の次のくだりである。

「男がふたり，どこかで
酒を飲みながら，私のことを話している

まあ，もしそれが男の子なら，わしの息子は
たくさんもらう。だからそうしておけばよい。」

テニスンの説明では，これはモードの話をしているところで父親二人が自分と彼女の結婚を取り決めている場面だ，ということであった。

キャロルはもう一つ，「詩人は憎悪の極み，侮りの極み，愛の極みを与えた」は何について言っているかを訊ねた。テニスンは，「ことばがもつ意味なら，それが何を伝えても，自分はまったくかまわない。それを書いた時は，「ほんものの憎悪，等々」のつもりで書いたのではないか」と言った。さらにテニスンは，「モード」くらい愚かな批評家たちから誤解された詩はない，という意味のことを語った。

ジェイムズ・マーシャルは不在だったが，夫人は訪ねてきた二人に昼食を勧め，写真を撮ることについても了解してくれた。家には16才の息子のヴィクターと家庭教師，それに12才の娘ジュリアがいた。

食事が済むとテニスンはテント・ロッジへ戻り，キャロルの方はマーシャル夫人の所へ自分が撮った写真アルバムを届けてからコニストンを歩いた。その途中で，ロバに引かせた荷車に乗っているテニスンの子どもたちに行き会った。

その日の夕食はテニスンの家に招かれて，再びテント・ロッジを訪れた。マーシャル夫人はキャロルが置いていった写真アルバムを夕方テニスンの元に届けさせていた。テニスンの家族はそのアルバムを見て気に入った様子で，特にエミリ夫人はたいそう感心して見ていた。

楽しい夕べはまたたく間に過ぎ，そろそろ暇をと立ち上がったキャロルは，まだ9時頃だとばかり思っていたが，すでに11時近いことを知ってひどく狼狽した。ホテルに戻ると玄関は閉まっていて長いことベルを押し続ける羽目になったのがひどく興冷めの結末ではあったが，しかしその日のことを日記には，「じつに素晴しい一日」と書いている。

翌日はコニストンからケジックへ行き，ウェブスター家に立ち寄ると，

娘のシャーロットとメアリ，その友だちのマーガレット・ギャティの写真を撮った。この時の写真は残念ながら現像に使用した液が不具合のためかうまくいかなかった。翌日もう一度撮り直して，今度はよいネガができた。

9月26日に乗合馬車でアンブルサイドへ戻ると，キャロルはすぐにコニストンへ向かい，マーシャル家を訪ね，そこでお昼をご馳走になった。午後は雨が降り続き写真は撮れなかった。日曜日には教会の礼拝に行く合間にマーシャルの息子のヴィクターと湖へ行ってボートで遊んだ。

キャロルはマーシャルの家をさらに二度訪れている。この時には，テニスンの家族とマーシャルの家族，それにテニスンの義理の弟エドマンド・ラシントンの写真を撮ることができた。

アンブルサイドを後にしたキャロルは2日後にクロフトへたどり着いた。ここでテニスン一家の写真ができ上がると，キャロルはもちろんすぐに詩人の元へ送り届けたことだろう。残念ながらその間の記録は残っていない。テニスンの家族とのつながりが再開するのはそれから2年後のことである。

### 3．ファリングフォードへ

1853年のファリングフォードは，ワイト島のなかでも周囲には何もない孤立した場所にあり，その佇まいと眺望が詩人の気に入った。女中は世間からあまりに遠く離れたところにきてしまったと嘆いた。当時は本土から8マイル隔てている海を手漕ぎのボートで渡るようなところであった。ファリングフォードという館の名前は14世紀の人物であるウォルター・ドゥ・ファリングフォードに由来している。

1854年3月16日には，テニスンに二番目の息子ライァネルがファリングフォードで誕生した。その5年後の1859年にルイス・キャロルはテニスンに会うためにワイト島のフレッシュウォーターへ行った。そこは島

の南西のフレッシュウォーター・ベイに近く，島の北西のヤーマスの港からは5.6キロ南にある。テニスンを訪ねるにはヤーマスの港から人は徒歩で行き，荷物はロバに運ばせた。

1859年4月7日にワイト島のファリンフォードへ渡ったキャロルはテニスンの家を探して歩き，庭の手すりのペンキ塗りをしている男にテニスンは在宅かと尋ねた。すると，「あそこにおられますよ」とその男は返事をして指差した。見ると，フェルト帽に眼鏡をかけたテニスンが芝刈りをしていた。テニスンはかなり強い近視のせいでよく見えなかったようだが，キャロルとわかると家に通してくれた。夫人は病気でかなりやつれてソファに横になっていた。

夕食を勧めようとするエミリ夫人を制して，テニスンはキャロルを一緒にお茶と軽い食事に誘った。翌日は夕食に招かれた。帰る前にテニスンは家の中を案内してくれた。喫煙室と図書室は現在もそのまま残っている。人ひとりが通れるほどの狭い通路と細い階段を上って行ったところにある図書室はかなりの広さがある[6]。2年前に湖水地方のコニストンで撮った一家の写真がエナメルを塗った硬い紙の枠に入れて，目の高さの所に掛けてあるのを見て，キャロルは嬉しかった。子ども部屋にはハラムがいた。ハラムはキャロルのことをすぐに思い出した。

軽い食事の後は2，3時間ほどテニスンと喫煙室へ上がって話した。そこには，『王の牧歌』という詩の原稿があり，見せてほしいと頼んだが断わられた。帰り際にテニスンは月明りの庭を歩いて門まで送りながら，自分の詩について話した。

翌日キャロルは約束した時間にテニスンをファリングフォードに訪れた。ジョン・シメオンというワイト島選出の国会議員もいた。テニスンは長い詩行がよく夢に出てくるという話をした。夢の中では，よい詩ができたと思うのだが目が覚めてみるとまったく思い出せなくなると言った。ただ，10才の頃に夢でみた詩の一部は覚えていた。それは，

雀がいちわ
手押し車に手紙を書くか？
このこどもっぽい詩を
おゆるしください。

この未発表の詩がおもしろいかどうかはともかくとして，その後の桂冠詩人を予測させるものとはキャロルには思われなかった。テニスンは，また別の夢の話もした。それは妖精を歌った長い詩の夢で，書き出し部分の数行は非常に長く，少しづつ短くなっていき，最後の50-60行は各行がすべて二音節だけでできていた。

持参した写真アルバムをゆっくりと見てもらうために置いて帰ることになり，キャロルは翌日それを受け取りに行った。アルバムのところどころには，キャロルが詩や引用文の書き込みをしていた。それを見つけたテニスンの子どもたちは読んでほしいと頼むのでキャロルは読み上げた。テニスンの写真の向かいには次の詩が書き入れてある。

詩人は黄金の国に生まれた。
頭上には金の星を戴き，
憎しみの極み，侮りの極み，
愛の極みを授けられている。

次男のライァネルはすぐには何のことかわからなかった様子で，しばらく考えた後で，「法皇だ」と言い出した。エミリ夫人はそれを聞くと，声を上げて可笑しがった。

「おい，法皇が一体どうしたって？」と，テニスンの声がした。しかし誰も説明しようとはしなかった。

キャロルのアルバムの中にはアリス・リデルが乞食の姿で写っている写真がある。専門家に頼んで，キャロルが彩色させた一段と見栄えがよい写真である。この写真を見てテニスンは自分がそれまでに見た一番美しい子どもの写真である，と言ってキャロルを喜ばせた。写真は，1859年

3月にオクスフォードで撮影した。

### 3.1 「乞食乙女」と古いバラッド

テニスンは，エリザベス朝の古いバラッドをもとにして1833年9月に「乞食乙女」という詩を書いている。出版したのは10年後の1842年である。クリストファー・リックスによればテニスン自身がこの詩に関してシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』第2幕1場に次の2行があることを指摘していたという。

こどものアダム・キューピッド，確かな腕で矢を放ち
コフィトゥア王は乞食乙女に恋をした

リックスは，テニスンがコフィトゥア王の話を読んだのはパーシーの編纂した古い英詩集のなかであろう，と書いている。トマス・パーシーが1765年に出した *Reliques of Ancient English Poetry* の第1巻には King Cophetua and the Beggar-Maid という1612年のリチャード・ジョンソンから引用した詩が入っている。この詩は全体が120行である。テニスンはその内容をわずか16行に凝縮した。パーシー編に出ている古いバラッドの方は，昔のアフリカの話という書き出しで始まっている。そこに出てくる王コフィトゥアは女性に興味のない人だ。それがある日，盲目の少年（キューピッド）の射た矢が胸に突き刺さり病の床についた。やがてその病を癒す方法はただ一つ，窓から見かけた灰色の服を着た乞食を妻にすることだと気付き，外に出ると乞食たちに自分の財布の中味をばらまいて与える。その場にいた乞食たちは地面に落ちたものを拾って走り去るのだが，みなの最後になった乞食を王は呼び止め，お前は私の妻になり最後は同じ墓に入ろうと言った。この古い英詩が乞食について語っていることは，灰色の服を身につけていることと，王の申し出に戸惑ってしまうがそれを受け入れるというだけで，器量や気立てについての描写はない。ただ，盲目のキューピッドの技と王の様子を描き，結

婚して後に二人は同じ墓所に葬られたという。テニスンはこのような内容の詩の背後に叙情を感じとり，キューピッドにはふれずに，乞食乙女の純粋さや美しさと彼女に惹かれる王をわずか16行の詩でうたい上げた。

組んだ腕を胸に当てた　その姿は
言葉では表せないほど美しかった
乞食乙女は裸足で
王コフィトゥアの前にきた
王衣と冠を着けたまま　王は玉座から下りて
彼女を迎えた
「不思議はない」と諸侯は言った，
「彼女は太陽よりも麗しい」

雲のかかった空に月が輝くよう
貧しい衣服の乙女は。
ある者は踝を褒め，ある者は目を，
ある者は黒髪と優しい物腰を褒めた。
可憐な顔，淑やかなこと天使のよう，
国中どこにも　見かけたことがない。
王コフィトゥアは誓って言った，
「この乞食の乙女を我が妃としよう！」(7)

クライスト・チャーチの学寮長をしていたヘンリ・リデルの娘が肩をむき出しにして素足で立ち，物乞いの手つきをしている写真を見たときに，テニスンは自分の「乞食乙女」の詩を思い出して「一番美しい子どもの写真だ」と言ったのかもしれない。キャロルはテニスンの詩から写真の着想を得ていると，キース・ライトは指摘する。アリス・リデルを

乞食姿で撮影したのは，従来言われてきたように変装することで子どもの遊び心を捉えたとか，身分の区別が明確な当時の社会でアリス・リデルがいかに恵まれているかを自覚させるものであるという説明よりも，キース・ライトの指摘にしたがって，テニスンの詩に戻って写真を見るとき，乞食姿のアリスには衣服に惑わされない，清らかで純粋な美しさを撮るというキャロル本来の美意識を見ることができよう。

「乞食の少女」のアリスを撮影した同年6月4日に，キャロルはエミリ夫人に手紙を書き，ハラムの写真とハラムとライァネル兄弟を一緒に撮った写真とを彩色したいので目の色と髪の毛の色を知らせてほしい，と頼んだ。実際にその写真に色付けがされたかどうかは分かっていないが，その後もハラムと手紙の交流を続けた。1862年1月には，自分が子どもの頃にナイフで木を削って遊んだことを思い出し，ハラムにナイフを送った。ハラムからはお礼の手紙がきた。その手紙にキャロルが書いた返事をみると，ナイフは直ぐには使わせて貰えなかったようだ。

> 「ナイフを喜んでくれて，嬉しいよ。もう少し大きくなるまでは，使わせてもらえないというのが残念だね。けれど，もうあの時より少しだけは大きくなっているのだから，もしかすると今ごろは使っているかもしれないね。君たちの誕生日がいつなのか教えてくれたら，君の弟にも誕生日のお祝を送ってあげよう。ぼくのよろしくを弟に半分あげて残りは君がとりたまえ。」
>
> 君の友だち
>
> チャールズ・L. ドジスン

**4．1860年から1862年**

1860年になるとテニスンはプリンス・コンソートから詩集 *Idylls of the King* に署名をして欲しいという手紙をもらった[8]。翌年8月には亡き学

友アーサー・ハラムと共に31年前に訪れたピレネーの峡谷を再訪し，In the Valley of Cauterez を書いた[9]。その年12月に，プリンス・コンソートは死去した。テニスンはアーサー・ハラムを失ったときの気持ちを思い起した[10]。翌年４月14日に，テニスンはワイト島にあるヴィクトリア女王の夏の家オズボーン・ハウスで女王に謁見した[11]。ここは女王の亡き夫アルバートが設計に工夫をした建物である。初めて会った女王は聖書に次いでテニスンの『イン・メモリアム』に慰められていると告げた。女王とテニスンは，最も大切な人を失った気持において通じ合うところがあった。翌年の1863年にはテニスンは家族と共に再びオズボーン・ハウスに女王を訪問した[12]。

1862年４月のキャロルの日記は紛失しているが，この頃に妹のメアリへ宛てた手紙によればキャロルは再びワイト島のフレッシュウォーターへ出かけて，４月16日には，テニスンの家で食事をしている。それはテニスンが初めてオズボーン・ハウスに女王を訪問した２日後のことである。テニスンは午前中はあまり話す気分にならないために姿を見せなかった。キャロルは子どもたちに「象の狩人」というゲームを教えて遊び，『オグラディさん』というアイルランドの物語を話した。それが終わると，子どもたちに付き添って近くのディンボラ・ロッジに住む写真家ジュリア・マーガレット・キャメロンの家へ出かけた。キャロルはキャメロンには既に会っていた。彼女は以前にテニスンの写真をくれたので，お返しに，『イン・メモリアム』のための索引をキャメロンに贈った。その索引は妹が作ったもので，キャロルは1862年１月にテニスンの出版社エドワード・モクスンに相談して印刷していた。

翌日，海岸に出るとテニスンの息子たちとキャメロンの息子が二人，それに詩人のヘンリー・テイラーの息子ハリーの５人が来た。子どもたちの年齢は７才から１２才くらいで，戦争ごっこのつもりなのか兵隊のような格好をして旗をもってきた。そこで子どもたちにウォータールー

の戦いを教えてしばらく遊んだ。

次の日は再びテニスンの家へ行くと，キャロルはハラムとライァネルに自分のアルバムの中に署名をさせた。詩を書いて交換するという約束をライァネルからとりつけることはなかなかうまくいかず，初めにチェスを12手づつ打つことになった。ところがわづか6手でキャロルが王手をかけてお終いになったことでライァネルは我慢がならず，クロケーのバットでキャロルの頭を一回打つと言い出したが，これはなんとか諦めさせた。結局ライァネルは詩を二つ『ウォータールーの戦い』と『プリンス・コンソートの死』をキャロルに書いて渡した。「非凡なり，というほどの詩ではないが，わずか8才の子としては，この半分ほども書けるとは思われないくらいよくできて」いた。ライアァネルには詩のお返しとして，キャロルはワーズワースの蛭取る人をうたった「決意と独立」の詩をパロディにした「淋しき荒地で」を書いた。『鏡の国のアリス』にはこの「淋しき荒野で」を書き直した「老いぼれた男」（または「鱈の目」）が入っている。

ワイト島は1860年を過ぎる頃には，観光客が増加してファリングフォードの近隣にもホテルや家が立つようになった。テニスンは観光客を避けて1862年の夏はフランスで過ごした(13)。

1864年に出版された『イノック・アーデンとその他の詩』はすぐに17,000部が売り切れた(14)。その翌年になると国内はおろか欧米その他の地域からも，まるで旧約聖書でモーセが起した「エジプトの疫病」のように手紙や寄贈本や未発表原稿が次々とテニスンのところへ押し寄せた(15)。テニスンに代わってエミリ夫人がすべての郵便に律儀に返事を書いていた。1874年にエミリが過労で倒れると，長男のハラムがケンブリッジを中退し父の秘書を引き受けるために戻ってきた。そして10年後，1885年には出版社を通じて『タイムズ紙』に，「テニスンは毎日届く数えきれない手紙に返事を出すことはとてもできないし，届けられる未出版の原稿に批

評を書いて返却することもできない」と書いて出した。夏を静かに過ごすためにテニスンは昔エミリが住んだことがあるサレーとサセックスの境，ヘイズルミアの南東のブラックダウンに近いところに，二つめの家オルドワース・ハウスを建てることにした。ヘイズルミアの知くに住んでいたアン・ギルクリストは1867年にテニスンに会った印象を，思っていたよりも老けてみえた，と語っている。当時60才近いテニスンについてギルクリストは更に次のように描写している，

「高貴な顔立をしてあらゆる点で王者である。目は非常に真面目で相手を見抜く眼差しをして，髪は長く黒かった。少し薄くなっていたが頭部には独特の美しさがあった。」(16)

テニスンの印象については，1861年にファリングフォードを訪れたギリシャ語学者ベンジャミン・ジョーイットも次のように書いている。

「(テニスンは)超人と子どもが一緒になっているようなところがある。会うたびにますますその人柄に尊敬を抱く。テニスンほど正直で，男らしく，温かい友人はいない。あけっぴろげで，子どものように誰にでもそこにたまたま居合わせた人に向かって，自分のなかに浮かんでくることを語る」(17)

ジョーイットといえば，1861年にオクスフォードのギリシャ語欽定講座の低く据え置かれたままの年俸（40ポンド）を上げようとする規定の改正案が教授会に提出された。審議は午後いっぱいかかった。問題点は二つあり，一つは欽定講座担当職についてであり，他はジョーイットの神学上の見解に反対するものであった。この二点が複雑に入り乱れて議論されたため，キャロルは両者を分けて論じるようにと発言した。キャロルが教授会でおこなった最初の発言であった。翌日ドラモンド・パーシー・チェイスが書いた文書が回覧され，キャロルはすぐに匿名で反対の文書「ギリシャ語教授職手当」を書き回覧した。結局，年俸は据え置かれた。しかしこの決定は1865年に覆されて，ジョーイットは500ポンド

の年俸を受けることになった。この出来事を題材にしたパンフレット「$\pi$の新測定法」をキャロルは1865年に出した[18]

ジョーイットがテニスンに初めて会ったのは1855年で，詩人が名誉博士号を受けるためにオクスフォードを訪れたときである。その後テニスンは再度オクスフォードを訪れて未発表の新しい詩を朗読したが，それを聞いたジョーイットは，テニスンに向かってその詩は出版しない方がよいと忠告した。するとテニスンは「そういうことを言われるのでしたら，先生がお昼に出されたシェリー酒について，あれはまったくひどかったですな」と切り返した。二人とも言いたいことをはっきりと言うが，気にしなかった。ジョーイットは度々テニスンの客となりファリングフォードを訪れた。1862年4月19日にキャロルが妹メアリに宛ててワイト島のフレッシュウォーターから出した手紙には，テニスンの客になっているジョーイットと一緒に散歩したと書かれていた。ジョーイットの年俸引き上げにキャロルが反対した翌年のことであった。

ジョーイットを一例としてテニスンの交友は詩人仲間に限られず様々な分野の人がいた。そのなかにはキャロルがよく知っている人々もいた。ラファエル前派の画家ミレーやホルマン・ハント，ワッツ，サリヴァン，舞台女優のエレン・テリーやソプラノ歌手のジェニー・リンドもファリングフォードを訪れた。芝居をよく見たキャロルは，テリー一家を幾度も訪ねて知っていたし，リンドについてはメサイアの演奏会で彼女の歌声に感動した。キャロルは晩年の1897年10月3日に教会の収穫祭の子ども礼拝ではスェーデンのナイチンゲールといわれたリンドの逸話を話している。リンドはマンチェスターに出かけたときに，演奏会の前に朝早く林の中を散歩していて雨にあった。そこでみすぼらしい家に雨宿りをさせてもらった。雨の止むのを待ちながら家の人と話をしていると，その日町にくる有名な歌手の歌を一度でよいから聞いてみたいという老女のことばにリンドは自分がその人であると名乗り，彼女のために歌をう

たったという。ジェニー・リンドがテニスンを訪ねたときには，その歌を聞くために近くに住む写真家マーガレット・キャメロンが自宅のディンボラ・ロッジからテニスンの家へピアノを運び込ませたという逸話も伝わっている。

1870年にテニスンがディケンズの葬儀に出席したときには，式が終ると参列者たちは一目彼を見ようと押し寄せてきた。この年の8月にオルドワース・ハウスは完成していた。広い道路もなく馬を替える宿場もない海抜245メートルほどの所に建てられた家は広くゆったりとしていた。しかしあまりにも人里離れていたために，畑で鎌を研ぐ音もしなければ，刈り入れをする人々の歌声もなく，羊や牛や鳥の声さえも聞こえないと詩人はこぼした(19)

## 5．最後の手紙

キャロルとテニスンの交友は1870年の春に壊れてしまった。1866年にテニスンがアーサー・サリヴァンのために書いた「窓」という詩が原因であった。「窓」は，1867年秘かに印刷されて，その一部が1870年3月にキャロルの手元に回覧されてきた。その後12月になってサリヴァンが付けた曲と一緒に発表された。モートン・コーエン編の『ルイス・キャロルの書簡集』には，まだ未出版であった詩のことでテニスンとの関係を悪くしたことを示す3通の手紙がある。それぞれ1870年3月3日，7日，31日にキャロルが書いたものである。3月3日の手紙で，キャロルはテニスンに宛てて，

> 「あなたの未出版の「窓」という詩があります。……友人が手書きの写しをもらい，今度はわたしにその写しをくれました。わたしはまだ読んでいないのですが，よければ喜んで読ませていただきたいのです……」

と書いた。手紙にはさらに続けてこの写しを自分が持っていることを許

してもらって気持ちを楽にしたいこと，また，それを友人たちに見せる許しを貰いたいと頼んだ。テニスンからはエミリ夫人の筆による断わりがきた。納得がいくまでは出版をしないテニスンだから，許可をもらってその詩を読もうとしたキャロルの行為を「紳士にあるまじきこと」と憤りを表した断わりである。

3月7日のキャロルの手紙には，テニスンからの返事がエミリ夫人の手で書かれているが内容はテニスン自身からのものと承知したうえで，テニスンが未発表の詩が回覧されていることを不快に思っているということに対して，

「このようにあなたの個人的な信頼を軽率に裏切った人はそれが誰であっても，極めて名誉に反することをしたと私は考えます。」

と，同情の気持ちを書いた。続けて，テニスンが印刷所のモクソンにその責任があると考えていることに対しては，

「この点に関して私が黙っていれば，あなたのお考えに同意していると思われるかもしれませんから，モクソン氏のために申し上げます。私の知る限り，彼は今回のことには何も関係がありません……」

と，キャロルはモクソンを弁護した。

テニスンから来た手紙には，

「そのような人々が何を行なっていようとも，著者がその作品を公にしていないときはそれなりの理由があると，紳士たるものは承知すべきである」

と書いてあった。礼を尽したつもりのキャロルは，テニスンのことばに気を悪くし，反撥をぶつけた手紙を出した。それを無視せずにテニスンは返事を出した。テニスンが夫人を通して書いた手紙は見つかっていない。キャロルには，手紙のことばは故意ではないとしても自分がなにか紳士にあるまじきことをしたという意味になるとして，

「この詩が現在回覧されていること，および私の手にその１部がきたことは私がしたことではありません。いったい私は何をしなかったためにあなたの言われる騎士道の名誉を重んじることに欠けているのかをしっかりとお尋ねしたい」

と憤慨した。

３月31日にキャロルが書いた手紙によれば，キャロルに対する不名誉の咎は撤回され根拠のないことは認められたようだ。しかしテニスンは謝まることも遺憾の意を表明することもしなかったために，キャロルは満足せず，二人のやりとりを揶揄した会話を作って送付した。それはいかにもキャロルらしい文ではあるが，相手がテニスンではやり過ぎというものだ。

「貴殿はまったく紳士ではない。」

「貴殿はそのようなことばで私にひどいことをされる。証拠をしめされよ，それとも撤回されよ！」

「くりかえそう。　貴殿の行いは名誉に背く。」

「それはちがう。わが行いの一部始終を申し上げた。貴殿の根拠のない誹謗に責任を取られよ，その責任をどうされるか？」

「以前は貴殿をもっと悪い人間だと思っていたが，結局は紳士かもしれないと考えるようになった。」

「今回の非難も前と同様根拠がない。もう一度訊ねる。貴殿は謂れのない誹謗をなした責任をなんとされるか。」

「貴殿を許す。もう何も言うな[20]。」

1871年12月に『鏡の国のアリス』の初版が出来あがった。オクスフォードのキャロルの元にはマクミラン社から特別に製本した３冊のモロッコ革の本とクロス製の本100冊が著者贈呈用として届いた。12月８日にキャロルはモロッコ革の３冊を，アリス・リデルとフローレンス・テリー

そしてテニスンに贈った。同年12月22日にはブラッドリー夫人に宛てた手紙のなかにキャロルは，「テニスンさんへの私の『和解の贈り物』に対して，彼からは自筆の礼状をいただいた。このことがとても嬉しい。」と書いた。冷たい氷は解けたかのようであった。

翌1872年６月，キャロルは気に病んでいた吃音を治すためにシェフィールドのルイン医師の指導を受けた。効果があると判断したキャロルは，６月19日にテニスンへ手紙を書き，同じ吃音があるテニスンの次男のライァネルがルイン医師の元へ行くことを勧めた[21]。テニスンは折り返し23日付けで返事を出して礼を述べ，「ライァネルの吃音はずいぶん改善してきており，年令が進むにつれてやがて無くなるであろう，従って，シェフィールドまで行かせるには及ばないと思う」と書いた。キャロルが更なる和解を求めて子どもの吃音を気に掛けて出した手紙は，思ったようには実を結ばなかった。1874年にキャロルは再びワイト島を訪れたがテニスンには会えなかった。家と使用人の写真を撮っただけで終わった。1878年のライァネルの結婚のときにキャロルはお祝の手紙を出した。返事はハラムからきた。そこにはお祝の手紙に対するお礼とほかにも返事を書く手紙が沢山あるので失礼，とだけあった。キャロルはその後二度とテニスンを訪ねていない。1886年４月ライァネルはインドの密林で悪性のマラリアに罹り，帰国途中に船上で亡くなり遺体は紅海に沈められた。

1890年の夏イーストボーンからロバート・ホーソーン・コリンズへ宛てた手紙の終りにキャロルは，「君がテニスンを訪問したときの詳しい話をしてくれたらと思う。彼自身のこと，夫人のことを。私も昔は彼と家族を知っていた，かなり親しくね。夫人はとても気持ちのよい楽しい人だったし，ライァネルは，私がこれまでに見た男の子女の子を問わず一番綺麗な子だったと思う」と書き，テニスンと家族のことを心に掛けていた。

**注**

(1) 研究ノート「乞食乙女」英語史研究会会報第6号田島松二編集／発行

(2) I nearly broke my heart with going to look at him. He lay like a little warrior, having fought the fight and failed, with his hands clenched, and a frown on his brow... If my latest-born were to die to-night, I do not think that I should suffer so much as I did, looking on that noble fellow who had never seen the light. (Tennyson p.105.)

(3) 「チャールズ・ドジスン牧師と聖ペテロ教会」英米学研究第34号

(4) *Diaries* vol. 3, n.138.

(5) プリンストン大学図書館所蔵のキャロルのアルバムより筆者の書写（1994年）を試訳。

(6) 2001年の夏にルイス・キャロル協会はこの部屋に50脚ほどの椅子を入れて研究発表に使用した。

(7) *The Poems of Tennyson,* ed. C. Ricks, 1987, pp.604-5 私訳

(8) *Tennyson* p.129

(9) *Tennyson* p.137

(10) *Tennyson* p.129

(11) *Tennyson* p.131

(12) 1873年になってテニスンはウィンザー城を訪問した。女王は城内にあるプリンス・コンソートの墓所に彼を連れて行くと，自らテニスンに説明をした。ルイス・キャロルは，オクスフォードで学ぶ皇太子の写真を撮ったりリオポルド王子の娘アリスに『不思議の国のアリス』を贈呈したことはあったが，女王に会って話しをするという機会はなかった。

(13) *Tennyson* p.127

(14) *Tennyson* p.131

(15) *Tennyson* p.129

(16) *Tennyson* p.158

(17) *Tennyson* p.159

(18) The New Method of Evaluation as applied to $\pi$. 1865. *The pamphlets of Lewis Carroll,* vol.I. The University Press of Virginia, ed by Edward Guiliano & Stan Marx

(19) *Tennyson* p.128

(20) テニスンにとって詩作は自分のために私かにおこなうことであり，ごく親しい友人に見せるとか読んで聞かせたりするもので，作品を出版して世間の目にさらすことは，慎みがないことに思われた（*Tennyson* p.93）

(20) 'If Lionel is, as I understand, still suffering, as I have done for most of my life, from that most annoying malady, I do most strongly advise that he should go over to Sheffield and hear Dr. Lewin.....'(*The Letters* p.178.)

**参考書目**

*Lewis Carroll An Illustrated Biography,* Derek Hudson, Constable, 1976.

*The Life and Letters of Lewis Carroll,* S. Dodgson Collingwood, T. Fisher Unwin, 1898

*The Pamphlets of Lewis Carroll* vol.1, The University Press of Virginia, 1993.

*The Letters of Lewis Carroll,* Morton Cohen ed. Macmillan, 1979.

*Lewis Carroll A Biography,* Anne Clark, Dent, 1979.

*Lewis Caroll's Diaries* vols 1-6, Edward Wakeling ed. The Lewis

Carroll Society, 1993-2001.

*Tennyson An Illustrated Life,* Norman Page, New Amsterdam, 1993.

*The Poems of Tennyson* vol. 1, Christopher Ricks ed. , Longman, 1987.

*The Reliques of Ancient English Poetry* vol. 1, Thomas Percy ed, a reprint of the first edition of 1765, Routledge/Thoemmes, 1996.